

2025年度一般入学試験 後期日程問題

英語・数学・国語 (2科目選択)

注意事項

1. 試験開始の指示があるまで問題用紙を開かないこと。
2. 2科目を選択し、解答すること。
3. 各科目の問題はつぎの順番になっている。
 - 「英語」・・・・・・・・・・ 1～5ページ
 - 「数学」・・・・・・・・・・ 6～7ページ
 - 「国語」・・・・・・(後ろから) 1～8ページ
4. 選択した2科目の解答用紙の所定欄に受験番号を記入すること。
5. 解答時間は2科目連続で80分である。科目の解答順、時間配分は自由とする。
(科目間の休憩は設けていない。)
6. 使用しない解答用紙等は、計算等に使用して構わない。
7. この問題用紙は持ち帰ること。

国

語

—
次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

年齢を重ねるほど、思索することが面白くなってくるのはなぜなのか。

そのことを思索すること自体の面白さが、まさにその面白さなのだとすることもできるだろう。巻き込むことで巻き込まれているそのものは、何なのか。

歳をとれば誰もが自ずから回顧態勢に入る。展望すべき前が見えないのではなく前が見えてしまっているのだから、後ろを振り返るしかないということなのだろうか。しかし、たかだか数十年の、取り立てて何があったわけでもない自分の人生など振り返ってみたところで、とくに何が見えてくるわけでもない。思い出すということが、自分の人生、そのあれこれ思い出すことであるなら、思索することがこんなに面白いことであるわけがない。人が思い出すというそこには、たんに事実的なあれこれを思い出すという以上の何かが含まれているのだ。かつて在ったことだが、今はない。しかし、今も在ることだからこそ、それを思い出すことができるのは、これ自体で十分な謎である。人は、思い出すという行為によって、自ら知らず形而上の謎に触れているのである。あの世的事実なこと、宇宙や靈魂の方角へと上昇してゆく以前に、この世の地平でこの世のことを回顧しているだけでも、人は実はこの世の地平を越えているのである。思うということは、今さらながら、何と不思議なことなのだろうか。

A、取り立てて面白いものでもない自分個人の人生を思い出してみるだけでもわかる。あんなことがあった、あ、あんなこともあった、思い出されないこともあるだろう、いや思い出されないことの方が多いはずだ。しかし、思い出されないことの方が多いとは、何を言っていることになるのか。今まで生きてきたということは、記憶される出来事の多寡ではなく、今まで生きてきたというまさにそのこと以外のことではないのだから、過去とはすなわち現在である。思い出されない無数のことどもをも含んだこの現在である。そこにはいかなる過不足もない。過去はそっくりこの現在に在るといふこの不思議な事実を認めるなら、人はそれを肯定するとか否定するとか言うことが無意味であること

にも気がつくはずだ。

B、否定したくなるようなこと、できれば思い出さたくないような出来事はたしかにある。しかし、否定したい、思い出さたくないとは、それ自体、それが在ることを認めているということに他ならない。在ったこととして在ることは、こちら側の勝手な解釈などキョゼツして、それ自体として在るものだ。この事実によく耐えられない時、人は、自分の人生を解釈し、意味づけし、構成し始めることになる。たとえば自伝のようなもの、自己のライレキを語るようなもの、それは、思い出したいことのみ思い出し、思い出さざるに語られるものだが、しかし、そのような仕方以外で、人が自分の過去を語るということが可能なものだろうか。思い出さなくても思い出さないことや、そも思い出されもしない無数のことどもをも完全に拾いあげ、客観的事実として過去を語るなどということが出来るものだろうか。

そんな芸当は誰にもできはしない。誰もそんな思い出し方をしてはいない。そのことを知ってさえいるなら十分である。人は己れの好むところに従って、思い出したいことのみ思い出し、思い出さざるに在る、けれども、思い出したい過去も思い出さたくない過去も、そっくりそのままこの現在にある、そう知ってさえいるなら、いかなる不都合も生じないのだ。だからこそ、誰もがそのようなようにして生きているのだ。**C**、自分の歴史をそのような過去の思い出し方として認めている人が、こと国家の歴史、民族の歴史となると、たちまちにそれを認められなくなるのはどうしたものか。歴史認識とは、まさしく認識ではないか。史観とは、まさしく史観ではないか。

史観を隠蔽し、歴史を改竄すると、それらの人々は責め立て合う。しかし、改竄できるようなものを、そも歴史とは呼ばない。史実は史実として在ったことだ。いやあるいはなかったことかもしれない。そんなことはどっちでもいい。人は、思い出したいことのみ思い出し、思い出さたくないことは思い出さないものだからだ。勝てば官軍、そんなことは当たり前だ。何が問題か。人はそのイデオロギーに従って過去を思い出す。それを歴史だと思おうのは、その人の勝手である。しかし、思い出されようが思い出されまいが、歴史は厳然として変わらない。なぜなら、われわれが現在に在るといふ事実が変わらないからである。

われわれの歴史に対する興味は、歴史の事実なり、歴史の事件なりのどうにもならぬ個性に結ばれている。ある事件が、時空の上で、判然とキョクゲン^③され、他のどんな事件とも交換がきかぬ、そういうふうな過去の諸事件の展開が、現在のわれわれの心中に現前していなければ、われわれの歴史的興味は、決して発生しない。なぜであるか。誰も知らないのだ。歴史資料の高度の分析や整理には、なるほど専門的な学問も必要であろうが、歴史資料という言葉は学問が発明したのではない。この言葉は、なぜだか知らないが、過去は過去のまま現在のうちに生きているという、心理的事実に根を下している。ある資料から、信長という人を理解する方法は、現に見聞している隣人の行動や話から、その人を直知する方法と、根底的には少しも変わらない。一片の資料と現在の生活経験さえあれば、仮説も理論も介在させずに、過去の人間を生き返らせることができる。

「なぜであるか」「なぜだか知らないが」過去は現在にあるから人はそれを思い出すことができるという、このことの不思議に驚くことをしないから、人は事実だとか資料だとかいうものを指して、歴史と呼ぶ勘違いを起こすことになる。歴史とは、思い出すというその行為以外の何ものでもない。人は、客観的に思い出すことなどできはしない。そんな芸当ができるのは、イデオロギーを思い込むことによって自分を忘れる時だけだ。イデオロギーに従って信長を理解して、何の面白いことがあるう。たとえ信長という人物が実は実在しなかったとしても、その為したとされる行為や、その語ったとされる言葉などから、その人とされるその人物を、現在の自分の生活経験から思い出してゆくことの面白さは変わらない。このとき人は、客観的事実とか客観的実在などという言い方は、現在という絶対的な存在については不可能であることを知るだろう。なぜだか知らないが、全存在は現在のうちにあるとは、心理的事実としての存在論的事実である。いかなることであれ、心が思うということとは、自分を思うということ以外ではあり得ないのだ。D 人は、歴史上の他人の出来事などに興味などもちようはずがないのだが、このことがこのような仕方では自覚されていることは、歴史家たちの間では、ほとんどないように思われる。

しかしたとえば、年齢を重ねるほど歴史的なことを面白く感じるようになるということが、まさしくそのことなのである。歴史上の人物がある事業を為し遂げたのはいくつの時だったのかということに、なぜ人はいつも興味を抱くもの

だろうか。自分の年齢とその生活経験に比較して、それを感嘆して面白がるという以上に、歴史の面白味などあるものだろうか。気づかずとも誰もがやっていることだ。それは、父親が死んだ歳を自分はすでに越えたというあの比較の仕方によって、人が感じるところのものと、根底的には少しも変わらない。このとき人は、年齢という確かな実在を介して、自己としての彼を知るのだ。そのとき彼の心持ちはこのようであつたらうと知ることができるのは自己である。彼としての自己である。歴史とは自己である。歴史を知るとは自己を知ることであるとは、当たり前すぎて困惑を覚えるほどだ。

歴史を鏡と呼ぶ発想は、したがって、正確である。歴史という鏡に映るのは、それが見も知らぬ誰なのであれ、つまるところ自己に他ならないからである。いや鏡がすなわち自己なのである。ゆえに鏡に映るすべてが自己なのである。歴史を客観的に見るなどということは、誰の経験のうちにも存しない空言である。そんなことは、鏡に映っているものと映している鏡とを分けられると思うに等しい不可能である。私などというものはいったん死んだものだと思って、静かに眺めてみるならば、何もかもが自己であるということとは、鏡面に鏡像が映るように明瞭なことではないか。――

E、歴史とは絶対精神の自己実現である^④とカンパシ^{注2}たへーゲルの歴史意識が、奇矯^平に聞こえらるるなら、それは自己意識の不足を示していることになる。そのような歴史認識は現状肯定につながるといった的はずれなものから、何か壮大な妄想でも見ていたのだろうかといった、ある意味でははなれなくもないものまで、彼の歴史認識はとかく悪評が高いようである。しかしおそらくそこに共通しているのも、人は歴史を外から見ることができ、自分と歴史とは別物であるというあの錯覚である。いやそんなことはない、彼らは言うだろう。歴史は人間が作るもの、だからこそわれわれはこうして議論しているのだと。

現在の行動にかまけてばかりいるから、歴史は自分が作るものだという錯覚が生じるのだ。死んだつもりで一度冷静に眺めてみればよいのだ。日々を生きているわれわれの、誰がいったい歴史を作ろうなどという意識で生きているものだろうか。歴史を作るとは何を作るものか。ビルを作り、商品を作るように、歴史というものは作るものだと思っているのだろうか。なるほど、十九世紀は理性主義の時代であり、二十世紀はそれが崩壊した時代であるとは、言われ

てみればそうなのかもしれない。しかし、それを言うのは常に後世の人間である。日々を生きている人間は、誰もそんなことは思つてやしない。われわれは、それぞれにさまざまなことをしながら、人生の日々を生きているだけだ。

(池田晶子『新・考えるヒント』所収「歴史」より部分)

注1 「イデオロギー」…人間の行動を左右する基本的な物の考え方の体系。観念形態。観念(idea)と思想(logos)を組み合わせた言葉

注2 「ヘーゲル」…ゲオルク・ヴィルヘルム・フリードリヒ・ヘーゲル (Georg Wilhelm Friedrich Hegel) 1770-1831

ドイツの哲学者 近代哲学・伝統的な西洋哲学を完成したとされ、弁証法という哲学的手法を用いた。

問一 二重傍線ア〜エの漢字の読みをひらがなで書きなさい。(2×4＝8点)

問二 傍線①〜④のカタカナを漢字に直しなさい。(2×4＝8点)

問三 空欄

A

E

 に入る最も適切な語を選び、それぞれ番号で答えなさい。(同じ語は一度しか使えない)

(3×5＝15点)

- 1、ところが
- 2、したがって
- 3、たとえば
- 4、なるほど
- 5、しかも
- 6、そうでなければ

問四

波線 a 「歴史認識とは、まさしく認識ではないか。史観とは、まさしく史観ではないか」とあるが、筆者は何が言いたいのか。正しいものを一つ選んで番号を書きなさい。(6点)

- 1、 国家の歴史、民族の歴史は、客観的な歴史資料に基づいて記述されるべきだ。
- 2、 国家の歴史、民族の歴史というものは、自分の過去を語ることは本質的に違う。
- 3、 国家の歴史、民族の歴史といわれるものも、ある一つの歴史の見方にほかならない。
- 4、 国家の歴史、民族の歴史が、人によって改竄され続けるのはしかたがない。

問五

波線 b 「ある資料から、信長という人を理解する方法は、現に見聞している隣人の行動や話から、その人を直知する方法と、根底的には少しも変わらない」とあるが、それはなぜか。正しいものを一つ選んで番号を書きなさい。(6点)

- 1、 信長でも隣人でも、その人物を取り巻く歴史的背景について深く理解する必要がある点では同じだから。
- 2、 歴史上の人物も隣人も、自分の過去の経験に照らし合わせることによって理解できないから。
- 3、 信長も隣人も明確な客観的事実をもとに、関心を持たれて理解されるという点では同じだから。
- 4、 歴史上の人物であれ、現存する隣人であれ、彼らを理解する方法は「思い出す」行為であるから。

問六

波線 c 「人は、客観的に思い出すことなどではいけない」とあるが、これはどういうことを言っているか。

文中から探して書きなさい。(7点)

ということ

問七

筆者は、多くの歴史家がヘーゲルの歴史認識に対して批判的であるのはなぜだと言っているか。文中の言葉を用いて八〇字以内で書きなさい。(10点)

問八

次の1～4のうち、本文の内容と合っているものには「○」を、合っていないものには「×」をつけなさい。

(4×4＝16点)

- 1、人は誰でも否定したい過去の出来事を忘れようとする性質がある。
- 2、人は日々の生活の中で、歴史を作ることを意識している。
- 3、人は年齢と生活経験をもとに、自分と過去の人物に優劣をつけている。
- 4、人は自分の過去のすべての出来事を主観的事実として捉えている。

問九

筆者は「歴史」とは何だと言っているか。文中から言葉を探し、□に一字ずつ漢字を書きなさい。

(4×2＝8点)

歴史

||

□□

||

□

次の漢字の読みをひらがなで書きなさい。(1×10＝10点)

二

- ① 貼付
- ② 斬る
- ③ 頓挫
- ④ 賄賂
- ⑤ 頬張る
- ⑥ 蜂起
- ⑦ 遮蔽
- ⑧ 喝采
- ⑨ 巧緻
- ⑩ 命乞い

三

次の傍線部のカタカナを漢字に直しなさい。(送りがある場合は送りがなも書きなさい)(1×6＝6点)

- ① 腰をスエテ、取り組む。
- ② クジユウの決断
- ③ ダソクな一言
- ④ イチマツの不安
- ⑤ 犬がナツク。
- ⑥ 初志カンテツ